

文学入門

創造と運動

日本民主主義文学同盟・編



文学入門

創造と運動

日本民主主義文学同盟・編



文学入門——創造と運動——

1970年9月30日 初版 ©

1971年1月10日 第2刷

定価 650 円

編 者 日本民主主義文学同盟

発行者 松 宮 龍 起

郵便番号 102 東京都千代田区富士見2の13の14

発 行 所 株式会社 新日本出版社

電話 東京(262) 4732番

振替番号 東京13681番

落丁・乱丁本はお取り替えいたします

〔録倉印刷納〕

はじめに

歴史はいま転換点に立っている。この歴史の呼びかける声は、国民の多面的な生活とたたかいを生き生きと反映した文学のための案内書、とくに新しい創造のための手引きとなるような本を求める声として広がっている。本書はそうした文学を愛し志す広い人々の声にこたえて、わが国の民主主義文学運動にたずさわる作家と評論家が力をあつめて執筆した「創造と運動」編、「理論と歴史」編の二冊よりなる入門書である。

わたしたちは、日本文学の民主的発展を願う立場から、本書が、類書でははたしえなかつた文学の本質にかかわる理論の解明、各ジャンルにわたる新しい文学創造のための具体的な手引きとなるようにとくに配慮してこれを編んだ。同時にまたわたしたちは、この二冊によってわが国の明治以降の文学の流れを跡づけるとともに、文学運動の諸問題についても理解がふかめられるようにとも留意した。

本書が、日本文学に求められている、国民の多彩な生活とたたかいを描き、日本社会の未来への展望を示す文学を生みだすために役立つことができるならばさいわいである。

一九七〇年九月

日本民主主義文学同盟

目次

新しい文学創造をめざして	
小説の方法について	霜多正次……9
はじめて書く人のために	右遠俊郎……22
労働者をどう描くか	中里喜昭……37
——未知で未解決なる——	
作品ができるまで	吉開那津子……48
——長編小説「旗」の場合——	
作品の読み方と批評	
批評の方法について	佐藤静夫……59
作品分析・長編小説	田村栄……71
——四迷「浮雲」・啄木「鳥影」——	

作品分析・短編小説……………飯野 博…88

——直哉「城の崎にて」——

創作技法

短編小説について……………江口 渙…105

記録文学について……………奥野 正男…120

戯曲について……………大垣 肇…132

現代詩について……………秋村 宏…147

短歌について……………碓田 のぼる…158

俳句について……………古沢 太穂…166

敷地 あきら

文学運動とサークル活動

文学運動はなぜ必要か……………窪田 精…187

——体験にそくして——

文学サークルの活動……………上原 真…203

——創造のためのいくつかの課題——

サークル活動の経験から I 前川史郎 217

——八幡製鉄戸畑製造所のなかで——

サークル活動の経験から II 千頭剛 222

——大阪民主主義文学協議会の場合——

サークル活動の経験から III 山崎寿美子 227

——「富山婦人作文の会」の場合——

外国文学の問題から

ソビエト文学の論争小史 草鹿外吉 235

「阿Q正伝」の二重性 丸山昇 250

——中国における近代文学と現代文学——

わたしの文学勉強

書くことの前に 松田解子 265

気違いあつかいのなかで 佐々木一夫 270

汗と油にまみれて 早乙女勝元 275

この道に師なし 早船ちよ 280

労働運動の体験から……………	土井大助……………	286
鉛筆と紙で考える……………	佐藤貴美子……………	291
人生行路と文学勉強……………	中本たか子……………	296
少年期の体験から……………	平迫省吾……………	302
読むと書くの違い……………	山岸一章……………	308

新しい文学創造をめざして

小説の方法について

小説は、詩、短歌、俳句、戯曲など他の文学様式にくらべて、表現上の制約のもっともすくない、自由な形式であるが、長編小説は、小説のなかでも、もっとも自由だといえる。

たとえば、短編小説は、戯曲が上演時間の制約をもっているように、一定の時間内に、一度に、一気に読みおえることができなければならない。エドガー・アラン・ポウによれば、「半時間か一、二時間」で読めるもの、ということ、「以下次号」などという勝手なことはゆ

るされない。

作品のあたえる印象の深さと統一とが乱されないためには、一気に読めるこのていどの長さのものがいちばん良い、とポウは言っている。長編だと、読者は疲労や中断によって、統一的な印象のあざやかさを妨げられるからだという。

短編小説は、だからそういう時間的制約があるので、なにもかも書くというわけにはいかない。主題にそくして、生活を集約的に表現しなければならない。深い意味

霜 多 正 次

をもつ生活の断面にフラッシュをあてるような描き方、あるいは暗示的、象徴的な描き方が要求される。

そのため、技術的には、ひとつひとつの言葉が主題に向かつて集中されるような、言葉の厳密な選択と、抜きさしならぬ構成の緊密さが要求される。珠玉の短編などというのは、そういうものであらう。

長編小説は、原則として、そのような時間的、量的な制限はない。ひと晩で読める数百枚の作品から、「戦争と平和」や「チポー家の人びと」や「大菩薩峠」のような数千枚の作品まである。

だから、作者は、書きたいことを何でも、いっさいがっさい書くことができる。自分の生涯を、母親の腹の中にいるときから、棺桶に片足つつこんでいるあたりまで、細どもらさず書くこともできるし、三代くらいにわたって、時代の大きな流れを書くこともできる。また何人かの人間の運命や、階級的、性格的な葛藤をつうじて、一定の社会の階級的構造や、その発展の方向などをしめすこともできる。

長編小説は、そのように分量に制限がなく、書きたい

ことは何でも書けるが、だからきわめて自由な芸術形式であるが、しかし当然、それは読者に読まれなければならない。読者のほうでは、「以下次号」とたえず興味を中断され、単行本のばあいでも、徹夜して読みおえるということは少なく、たいてい何日もかかって読むのだから、途中で投げだすことがないように、興味をひきつけておく魅力がなければならない。その意味では、逆に読切小説よりも条件がきびしいともいえるだらう。

説話や物語としての小説の原形は、どこの国でも古くからあるが、こんにちふつうに使われている意味での小説——近代写実小説の発生は、ヨーロッパでもようやく十八世紀になってからである。そして、詩や戯曲よりもむしろ軽んじられていた小説形式が、文学の主流を占めるようになったのは、十九世紀になってからである。

近代小説の発生は、いうまでもなく、近代市民社会の形成にともなって、個人の自由と民権が尊重され、教育の普及や製紙・印刷術の発達などによって、文学がもはや貴族やそのまわりの特権的な知識階級の占有物でなく

なつたことに起因している。そして人びとは、これまでのような英雄や佳人の伝奇物語でなく、平凡な一市民としての現実的な生活のリアルな描出をよるこぶようになつた。

そのような近代小説が、ヨーロッパで最盛をきわめた十九世紀には、その主流が長編小説であつたことも周知の事実である。それは近代的な人間の解放をもとめ、自由を追求していけば、必ず社会との衝突を生み、主人公を社会的、空間的ひろがりへと、時間的経緯のなかで描かなければならないからである。また、前近代的な文学では、人間を善玉悪玉、賢者と愚者などに裁断して、筋も荒唐無稽で怪奇的多かつたが、近代の科学的、合理的精神によつて真実を追求しようとする近代小説では、人間の変化・発展、社会との葛藤をリアルに描かなければならないから、自然長編小説になつたのだとおもわれる。印刷術の発達や教育の普及によつて、長い小説を読む読者がふえたことも大きな原因だつたであろう。

もちろん、ヨーロッパでも、ボウやモーパッサンやチエーホフなどのように、すぐれた短編作家もいるが、十

九世紀リアリズム文学の主流はやはり長編小説であつたし、二十世紀の今日にいたるまで、その趨勢はかわつてはいない。

ところが、日本では、近代文学の主流はむしろ短編小説であつたといえるだろう。長編小説は主として新聞などによる大衆小説に多く、「純文学」の主流は、すくなくとも戦前までは、やはり短編小説であつたといえる。その理由については、いろいろ説があるが、わたしはつぎのように考えられるとおもう。

第一には、近代的な個人の解放をもとめ、真実を追求する文学では、当然社会との葛藤がなければならず、ひろい社会性が要求されるわけであるが、日本では、そのような自我解放のたたかいが、天皇制社会の厚い壁にはばまれて、十分に開花できなかった。たたかいはせいぜい家父長制とのたたかいとどまって、それも多くの場合、勘当というような敗北的、逃避的な形をとることが多かった。社会とのたたかになると、困難はより重層的だつた。

明治時代には、それでも「浮雲」や「舞姫」や「破戒」

などにみられるように、社会的なひろがりをもった作品が多かったが、いずれも、たんに主人公が敗北していくというだけでなく、作家の精神そのものが、天皇制社会に屈服していく経路をたどっている。

自然主義以後になると、作家の近代精神は、社会とのたたかいよりも、それから逃避して、「文壇」という特殊な社会で純粹培養されるような形になり、「私小説」

「心境小説」として「純文学」化していった。それが短編小説を文学の主流におし上げ、珠玉の作品を多く生むにいたった第一の原因だとおもわれる。日本の印刷業の発達でいごと、読者の文学的要求もまた、文芸雑誌の短編小説掲載をもとめていたといえるだろう。

第二には、日本の文学伝統そのものが、本来、合理的追求と社会性を要求される長編小説よりも、象徴性や抒情性により多く支えられる短編小説に適していた、ということができると思う。

日本文学の伝統、一般に日本的な美意識が、自然や社会との闘争、征服よりも、それとの調和を基調としていることは、ひろく指摘されているところである。古来、

異民族の征服・支配をうけたことがない島国で、水田農業による村落共同体社会が長く安定して閉鎖的につづいたために、日本では、論理的思考やレトリックよりも、枯淡とか幽玄とかさびとかという心情的優雅さや繊細さが尊ばれた。そういう美的伝統が、前記の理由と重なって、「私小説」や「心境小説」などの「純文学」を生んだと考えられる。

日本では、長編小説も、短編をただひきのぼしたようなもの、作者の芸術的心境のくりかえしによって印象を強めようとする作品が多く、あるいは自叙伝風な、長い告白小説になりがちである。

物語のばあいでも、構造的というよりは、同じ平面上に並列していく形になりやすい。たとえば「源氏物語」は、光源氏をめぐる何人かの女の並列的な物語で、それらの女相互に葛藤や相剋があって、作品世界が複雑な重層的構造になっているわけではない。この伝統は、西鶴の「好色一代男」や「好色一代女」などにもひきつがれていて、つまり一人の男や女の一代に、つきつきにいろいろな女や男があらわれて遍歴を重ねるが、けっきょくうづ

ろいゆく時の流れに現われては消えていく、という形になっている。

こうした日本文学の伝統は、他の芸術分野でも、たとえばヨーロッパの大壁画のようなものが発達せず、絵巻物風になること、オーケストラが生まれなかったことなどとも関連して、しばしば指摘される日本文化の特色になっている。

これはけっきょく、先にふれた日本の閉鎖的、静止的な農耕社会が生みだした芸術形式だといえるだろう。つまり異民族との接触や闘争がなく、牧畜や遊牧などのような動的な生活でなく、稲作という静的な共同体生活のなかでは、人間相互の意志が通じやすく「話せばわかる」式になって、理づめの論理的な思考は発達しにくい。だから、ものともとの関係、それが全体のなかで占める位置などにはあまり関心がいかず、ものそのものに関心が狭かぎられる傾向を生む。そして、ものそのものへの関心は、他との予定調和の上で、他との関係は省略され（日本画の広い空間のように）、もの自体への繊細で優雅な情緒的集中を生む。

また、諸行無常というのが、日本文化を支える根本思想のひとつだが、経験が蓄積され、論理化されて構造化していくよりも、そのつどおし流されていく傾向をもつ。

これらのことが、省略を重視する純粋な心境的短編小説をさかえさせ、物語の並列方式を生む社会的要因になっているとおもわれる。

このような文学伝統は、もちろん、こんにちもお根づよく生きていて、現在の複雑な資本主義社会が要求する構造的な長編小説の発展をおしとどめているようにおもわれる。

たとえば、川端康成は、現代日本を代表する作家だとされてノーベル文学賞をうけ、その作品は諸家によって推奨され、ひろく読まれている。そして川端の文学が、東洋的虚無思想を根底とする妖しい感性的世界の再現であることも周く指摘されている。かれの長編小説、たとえば「雪国」とか、「千羽鶴」とか、「山の音」、「眠れる美女」などの作品は、その文学の本質において、「伊豆

の踊子」や「禽獸」など初期の短編小説がただ長くなっただけにすぎないものだといえるだろう。

つまり川端文学は、先にのべた日本文学の伝統をもっとも忠実にまもっているという点では、たしかに「日本の代表的作家」といえるかもしれない。

だが、こんにちの日本人は、そのような文学にはたして満足できるだろうか。こんにちの日本人が、その日常生活でつき当たっている悩みや思想感情から、それはあまりにもかけはなれた世界だといわなければならない。

たとえば、川端は自分の文学について、こんなことを書いている。

私は「戦争からあまり影響も被害も受けなかった……私の作物は戦前戦後にいちじるしい変動はないし、目立つ断層もない」「敗戦後の私は日本古来の悲しみのなかに帰ってゆくばかりである。私は戦後の世相なるもの、風俗なるものを信じない。現実なるものもあるひは信じない。近代小説の根底の写実からも私は離れてしまひそうである。もとからさうであつたらう」

つまり川端の文学は、近代日本の作家たちが嘗々と積

みあげてきた「近代小説の根底の写実」から離れていくところに成立していることを、かれ自身が認めており、そのような文学が、こんにちノーベル賞を与えられ、賞讃されているのが日本の文壇状況なのである。

日本は十九世紀も半ばをすぎてから、ようやく近代資本主義社会の仲間入りをしたが、それも天皇制という絶対主義的な封建遺制をかかえこんだままであった。そのため、資本主義が要求する近代科学や、その根底を支えている近代思想やを急いで移入し、教育を普及する必要に迫られたが、それは当然天皇制とは矛盾し、その矛盾を野蛮な警察国家の権力でおしつぶし、また朝鮮、中国への侵略によってそれを隠へいしてきたのだった。

しかし、そのような強権の抑圧のもとでも、文学者たちは近代思想とその文学的表現である近代小説のリアリズムとを守り抜き、いびつな形ででもそれを育成してきたのである。そして、敗戦によって絶対主義の強権が崩れたとき、作家たちが新しい文学にかけた可能性は、これまでの盆栽化した「私小説」の否定、克服であった。そして多くの長編小説が書かれたのである。いまでは、